第61回歴史地理教育者協議会全国大会（北海道大会）レポート

分科会：第21分科会（障がい児教育）
レポートテーマ：「高等部1年の文化祭劇の取り組み」
（＊前任校都立光明特別支援学校での実践）
レポート作成：2009年7月27日
報告者：竹下忠彦
所属：都立府中特別支援学校（東京歴教協）

１．はじめに（問題提起、本レポートの目的）

ここ 7 ～ 8 年私は歴教協全国大会の障がい児教育分科会に連続して参加している。全国大会の分科会での重要なテーマのひとつに、青年期にふさわしい教育の中身の検討がある。

今レポートで報告者は、前任校（都立光明特別支援学校＝肢体不自由校）の高等部 1 年生の文化祭における劇に、学年の行事担当責任者として、どう取り組んでいったかを報告する。

肢体不自由養護学校（特別支援学校）では、年々、児童生徒の障害の重度・重複化が進み、また障がいの幅が広がり、認識の力もさまざまな児童生徒を抱えるようになっている。以上のような実態に加え、現場では、個別指導の考え方が安易に持ち込まれ、集団で学習体験を重ねていくような取り組みが、大変やりにくくなっている。個別にひとりひとりの児童生徒のもっている力を丁寧に伸ばすことは重要であるが、集団的な学習体験（経験）も重要であり、集団的な学習体験（経験）を通じ、伸ばされていく個々の力がある。

付け加えるならば、東京都では公立学校教員の異動が頻繁になり、一つの学校に腰をすえて教育活動に取り組む教員が少なくなってきている。そういう中で集団的な学習指導、行事指導の継続は、しだいに困難をかかえてきている。

今レポートは、そのような状況の中で、（転勤したばかりの）報告者が、①生徒たちをどのようにとらえ、学年劇を作り上げていったかを報告し、②どのようにすれば、教員が集団として生徒に集団的な学習体験（経験）の指導ができるのか、を考える１つの材料を提供するものである。

なおこのレポートは、2 月の歴教協関東ブロック研究会、6 月の東京歴教協町田サークル定例会で報告したものに検討を加えて修正をしたものである。

２．実践の背景

・東京都の教育をめぐる状況
・都立光明養護学校（特別支援学校）の説明
　（東京都世田谷区松原 6-38-27）
・高等部の説明
・2006 年度高等部 1 年生の説明
　学年生徒 20 名（本校通学生徒 18 名、訪問学級生徒 2 名）
　学習グループ　１グループ３名　角、藤山、若井
　　２ａグループ　竹居、信夫、中山、夷隅、横山
　　２ｂグループ　牧野、細田、小里、山元
　　３グループ　杉山、杉下、中井
　　４グループ　小森、河合、一柳
　　訪問学級　宮島、内藤　（仮名）
　教員　１グループ　Ａ先生（１月から産休に入る）、**M先生（学部副代表）**
　　２ａ　Ｋｕ先生（光明 2 年目。ベテラン）、**竹下**、
　　Ｓ先生（非常勤講師の若い先生）

２ｂ　　Ｓ先生（学年主任）、Ｉ先生（教員２年目）
３　　Ｔ先生（音楽）、ＫＴ先生（経験１年の産休先生、青年）
４　　Ｎ先生（進路主幹）、**ＫＡ先生（中堅の先生）**
訪問　　Ｙ先生（異動してきたばかり、ベテラン）

・2006 年度高等部教員の状況（異動が多い、その他）
・レポーター異動１年目の実践である。

・高等部１年は、移動教室なし。体育祭６月、文化祭 11 月（初旬）。
学年全体で集まる時間は、毎朝の学年朝の会（15 分）、1 週間に 1 回の学年ＨＲ。給食の時間。
・レポーターの立場
2006 年度に光明養護学校に異動。
2006 年度の高等部１年の学年担任。２ａグループの担任。
2007 年度 2008 年度は、学校を離れ、大学院研修。2009 年度に現場に復帰。

３．文化祭（光明祭）の取り組み（本論）

①今回ストーリー性のある劇ではなく、「生活劇」を選んだのは、なぜか。

－生徒の実態と、教員集団と担当者の関係から、生活劇を選んでみた－

理由：・１学期中に、４グループの生徒たちが、自分たちのやりたい劇を明確に出してこなかった。４グループの担当の先生も積極的な動きもなかった。
・「生活劇」は、個々の生徒の持ち味を出せるのではないかと考えた。
・「生活劇」は、障害の重い生徒にもわかりやすいのではないかと考えた。
・実際に取り組みがはじまってから教員がどれくらい積極的に関わってくれるか不安だった。既成の劇をもってくると、担当者にお任せになるのではないかという不安もあった。
・「生活劇」に取り組むことを通じ、教員にも生徒にも脚本（演技）の内容を考えてほしいと考えた。

②学年劇にどのように取り組んでいったか。

－資料に沿って説明－

ポイントＡ：担当者の提案への学年の教員集団の意見をもらい、提案者がその意向を組みながら対応した。

９／１の提案に対し、９／２１のような提案に変化
高１学年会の意見
→・主に教員の指導の問題から、２つのグループに分けるのが妥当。
・各場に各生徒が出演するのは無理。
・第３場は動きが少ない方がいい。

→　３場構成、劇中劇（第２場）とする。

第１場は、予めビデオに撮る。
第２場が、「劇中劇」
第３場は、フィナーレ（結果発表と舞台挨拶）（動きがない）

構成としては複雑だが、
生徒の劇としての動き・演技内容は「第２場」を中心に考えればよい。

９／２１の提案を受けて
第１場について；ＫＡ先生　　第２場の手品グループの場面について；Ｍ先生が動き出したことが、この劇の成功の原因の一つと考える。

９／２１の方向性決定以降の動き
第１場（ビデオ）
おおざっぱな台本を竹下が考え、ＫＡ先生（4 グループ担任）にバトンタッチ。ＫＡ先生が、時間をかけ丁寧に４グループの生徒たちから意見を聞き取り、生徒自身からだされた台詞を考え、ビデオも撮影した。
ＫＡ先生と４グループの生徒が中心になり、第１場を完成させる。

第２場（劇）
劇グループ：竹下が中心に構想を練る。
ｉ）劇の内容をウエストサイドストーリーからもってくることを、竹下が提案し、あらすじの素案を考える。
ⅱ）ボールスポーツチームとダンスチームに分けて演技。各チームに所属する生徒の演技と台詞を各担任に考えてもらう。
ⅲ）全体の構成は竹下中心に行い完成。

手品グループ：M先生が、中国式手品のイメージで行こうと構想提案。
同じ中国手品ショーの中で、３つに分かれた構成。
３つのグループの基本的イメージを示し、あとは各担任に演技指導をまかせる。全体の構成はM先生中心に行い完成。

第３場　　：第２場を早く収束させること（表彰をうまく行うこと）。
全員の紹介を分かりやすくする。
→学年会の意見である。これを反映した脚本を竹下が書く。

ポイントＢ：各生徒の劇の役割が決まった後は、各担任が当該生徒と相談しながら脚本にそった演技内容、台詞を考えることと、演技指導に責任をもった。

４．各生徒の様子

★４グループの生徒

一柳　雑技団の一員役として、楽しみながら演技することができた。練習段階ではなかなかうまくいかなかったビーンバック投げを本番当日は笑顔で見事に決めることができ、精神面での成長を感じた。エンディングのメンバー紹介で得意気にアピールする姿が印象的だった。

河合　普段は関わる機会が少ない他グループの友だちとペアになったことで、どのように関わればよいのかを考え、仲良くなれるよう工夫していた。同じグループの友だちに対して厳しい意見を言うことがありますが、相手にわかりやすく伝えることも少しずつできるようになってきている。

小森　劇中ではダンスを披露した。友だちとどのように動いたらよいか、視線や表情なども工夫して、見ている人を楽しませる演技が出来た。

★３グループの生徒

杉山　サッカー選手の役を、電動車いすで意欲的にこなし、台詞もよく覚えて、特に本番ではとても大きな声で言うことができた。

杉下　中国雑伎団の進行役を務めた。練習を繰り返し、台詞や動きの多い役を自信を持って演じることができた。電動車いすの操作は目的の銅鑼まで行って正面を向くまでを全部一人で出来た。また、自分の台詞を言うタイミング、友だちの台詞、銅鑼を鳴らすときのタイミングなどを全て覚えることができた。

中井　練習からとても頑張って、台詞の練習は繰り返してよく覚え、ダンスの練習も「もう一回やろう」と積極的だった。予行で不安だった台詞が本番ではうまく言えて、「うまく言えたよ」ととても喜んでいた。タンゴのダンスは身体をいっぱいに使って伸び伸びとした演技が出来、お客さんからたくさんの拍手をもらった。

★２ｂグループの生徒

牧野　はじめての光明祭にも関わらず、最後まで楽しく演技をすることができた。劇中のフラメンコでは、練習の時に見せていた手拍子やステップをあまり見せることが出来なかったが、大勢の観客を前にしても笑顔で演技やダンスをすることが出来た。今回の劇のタイトルを決める時、教員と相談して「ノリノリ高 1」という提案をした。投票の時にも自分の提案したタイトルにしっかり手を挙げ、最終的に自分の提案したタイトルに決まった。

細田　中学部の時より、長い演技時間にも関わらず、最後まで楽しく演技することができた。サッカーのシーンでは、練習の時に見せていた自分でボールをセットして足で蹴るプレイは、披露することができなかったが、大勢の観客にアピールしながら楽しくプレイをすることができた。

小里　劇中でタンゴを踊った。小森さんと手をつなぎしっかり自分の足でステップを踏みしめることができた。

山元　自分の手で車いすをこいで舞台の中央に躍り出ることが出来た。「オーレ！」のかけ声もがんばった。

★２ａグループ

竹居　劇中では、スポーツ団に入り河合さんとペアで野球をする役を演じた。河合さんと２人で練習を繰り返す中で、２人の演技のタイミングが合うようになった。ボールを投げる役だったが、教員が合図すると演技するタイミングがわかった様子で、教員と一緒に手を出し、ボールを押し出した。大勢の観衆の前でも練習時と同じように演技した。

信夫　練習時は、しっかり歩き、雑伎団の皿回しの演技が出来た。本番では眠そうだったが、練習の成果が発揮出来た。頑張って歩き、皿回しが出来た。

中山　早々に自分の役割（雑伎団）を理解し楽しんで練習した。部分練習で他の人の演技を見るときもとても楽しんでいた。知らない人が沢山いる本番の舞台より、なじみの人が沢山いる学年での準備活動の中でいきいきとした表情を見せていた。

夷隅　学年の友だちとタンゴのペアで踊った。初めのうち事情が分からず動きが悪かったが、次第に理解してくるとスムーズに動けるようになり、いい表情で踊るようになった。

横山　練習でうまく役の雰囲気をつかみ本番に臨んだ。毛一家の「風の２人組」の役で、中山さんとコンビを組んで出演した。練習では、自分たちの台詞やシャレを楽しみながら取り組んだ。本番では、スピード感を楽しみ、いい笑顔が出ていた。

★１グループ

角　中国雑伎団の一員として劇に参加した。多くの人に注目されるのが苦手なのだが、当日はしっかり顔をあげ、ゲートトレーナーで歩く姿を観客に披露した。練習を重ねることにより、自分がやることをしっかり意識し、苦手なことを楽しいことへと少しであるが切り替えることができるようになってきた様子である。

藤山　中国雑伎団の一員として、出演した。練習ではうまくいかなかったマジックの場面を見事にこなした。本人にとって普段は眠たい時間であるが、本番では立位板の姿をしっかり披露できた。

若井　練習時から普段の授業と異なる生活リズムに少し疲れもあった様子だった。しかし、練習にもしっかり参加し、本番では中国雑伎団役をしっかりこなした。

●ＫＡ先生からの聞き取りインタビュー（2009/7/26）（資料⑧）

４グループの生徒の様子

保護者の反応

・「わかりやすい劇だった。」
・「４０分の劇。さすが高等部」、などが報告者が直接聞いた声。
・訪問のＹ先生からは、訪問生の親が「画面で出演できてよかった。さすが高校生、こん

な劇ができるのですね。」と感想を言ってくれたよと伝えられた。
　また、（訪問生）本人が画面出演するということで兄弟が声の出演をやってくれた。家族で関わってくれてよかったと、家族の様子を伝えてくれた。

５．総括（まとめ）

よかったこと、反省点（レポーターの個人的反省・感想）

●教員に関係する評価反省
・各先生が各生徒への演技指導をしっかりしてくれたこと。ＫＡ先生とM先生が劇指導をひっぱってくれたことが今回の劇が一定の成功の要因ではないか。
・各教員が各生徒の持ち味を引き出す指導をしていた。
　（→各教員が担当者「お任せ」にならず、必ず自分で考えた指導をする場面があった。）
・教員にとっても、学年の全生徒の様子を総合的に知るいい機会になった。
・教員主導になってしまったのではないか。生徒の持ち味は出せたが、生徒の主体性は？特に４グループの生徒
・劇の内容に、「青年期に入った生徒たち向け」という雰囲気を醸し出せたとは思うが、、、それを、教員が主導しすぎていないか。
・学年会の意見を聞きながら、それを踏まえて準備したので、「例年より準備が遅い、大丈夫か」とずっと指摘され続けた。本格的に動きだしたのが、９／２１以降で、確かに衣装や舞台装置、音楽音響の準備等が大変になってしまった。

●生徒に関係する評価反省
・生徒にとって、普段もっている力、持ち味が出しやすい劇であったのではないか。
・生徒にとって特に他グループの友達のことを（再）認識する機会になっていた。グループの生徒同士の交流がたくさんできたのではないか。
・４グループの生徒たちは、担任の先生とセリフを自分たちで考えた。これにより、生徒たちは第１場を積極的に演じていた。

●学年会での反省（参考資料）

課題（または議論してほしいこと）

・ストーリー性のある劇でなく、「生活劇」に取り組んだが、その妥当性は。「生活劇」のメリット、デメリット
・教員集団として劇指導に取り組めたか。
・青年期にふさわしい内容になっていたか。
・このような劇学習（行事の取り組み）をどのように記録し、評価していったらいいのか。
・歴教協のレポートとして考えた時、内容に何を補強していったらいいのか。
・社会科あるいは養護学校の教員の専門性を活かした劇指導とは。